

一九回伊豆文学賞、最終候補

歯科医と僧侶と帆船

(2005、補筆2017)

素晴らしきヨット乗り

故小山田齒科医、

故原田一也、

両氏に捧ぐ

1、帆船模型

「仁科の**寺の住職がこの間、亡くなってね。まだ五十才半ばだったのに・・・」

天井向いてあんぐりと開いた私の口に岡田先生の言葉が飛びこんだ。歯科医院の診療台で開いたままの口ではまともに返事できないから、あわ、あわ、と私は声を出した。住職とは会ったことは一度もなかったが、岡田先生の関係で記憶している。

岡田先生は伊豆、松崎町の歯科医で、八十才を越した老医師だ。私は、医者は、とくに歯医者は若い時から嫌いだからずっと避けてきたが、六十才を過ぎるとそうも行かなくなり、歯の不具合が多くなつてついに、歯科医の世話になった。

私のヨットを係留しているマリーナの栈橋を挟んで、黒い小さなヨットが係留してあった。夕方になると、白髪のヨットマンが現われて船を出し、風を拾ってその辺を走ってくる。それが実に颯爽としていて格好よかった。私も年をとつてもああいふ風に毎日海に出られたらいいな、と理想像のように思えた。小一時間ほどして栈橋に戻ってくると船を舫い、その間に、目と鼻の先で船の片づけをしている私と会話を交わすことになる。痩せて小柄だが、鷲のような精悍な風貌だ。

こうして岡田歯科医師と懇意になった。痛い歯を抱えて歯医者に診て貰わざるを得なくなったときに、同じヨット乗りの先生ならいいかな、と思い、それ以来ずっとかかりつけの歯医者として通うことになった。ヨットに乗っているから生粋の海の男かと思つたが、実は筋金入りの山男で、若い時は歯科医師の山岳会でロッククライマーとして鳴らしたそうだ。いまでも診療所には険しい稜線の山岳の写真が数枚飾つてある。

私の予約はおおむね朝一番で、九時半だった。ある朝、診療所の入口が開かない。鍵がかかっている。やむを得ず診療所の裏にまわり、先生の住居の玄関（これは開け放してあった）から、奥に声を投げた。

「先生、診療所の入口が閉まっています、今日は休業？」

「あれ、変だな、開けておいたのだが？」

奥から先生が顔を出した。（それから後も閉まっていることが数回あった。この医院は会計まで、先生が一人ですべてやっている。）

そのとき、はじめて先生の居住宅を覗いたのだったが、私は玄関の棚に飾つてあったものに、強く惹きつけられた。

「ああ、それね」

先生が私の見とれていることに気がついていった。

「見事な帆船模型ですね。先生が作ったのですか？」

「いやいや、とんでもない。それ一艇作るのに、一年はかかるね」
帆船模型はピンからキリまであるが、それはまことに見事な出来だった。船胴や甲板は細い板が一枚一枚手で貼り合わされて作られ、マストや帆桁は精巧極まりなく、そこに索具が蜘蛛の巣のように縦横に張られ、数えきれないほどの帆が風を迎えて広げられている。それはカティサーク号という有名な帆船の模型で、立派なガラスのケースに収まっていたが、ガラスケース自体は先生が特注したそう
だ。

「仁科の寺の住職が作ったんだ。」と、先生がガラスのケースの上の埃を指で弾いていった。

「僧侶が帆船模型を？」

「うん、これは奇贈されたのだが、ほかにもいろいろ作っているよ。」

「ほう、それはぜひ拝見したいですね。その僧侶はヨット乗りですか？」

「いや、ヨットは駄目だな。一度私の船に乗せたら、船酔いしてげーげーやってた。そのうち、紹介するよ、私の患者だから。」

帆船模型の話はそこで終わって、先生は診療所の玄関を開けに行き、私もそっちに回り、診療台に乗ってから、僧侶と帆船という奇妙な組み合わせについて、思いを巡らせた。

だから、僧侶が亡くなったと聞いた時、僧侶の死因よりも先に私の頭に浮かんだのは、残された帆船模型のことだった。

「先生、で、あの帆船模型はどうなったのでしょうか？」

「ああ、帆船ね。数が多いから部屋の場合塞ぎだと、奥さんが持て余してね。だれか引き取り手がないか、と悩んでいたよ。粗大ごみで捨てるわけにもいかないしね。」

渡りに船だ。(ちよつと表現が違うかな?)

「そうですか。困っているなら、私が引き受けてもいいですが・・・」と切り出してみた。

「そう。じゃあ奥さんに聞いておくよ。奥さんも私の患者だし、今週予約があるから・・・」

それから一週間して私の予約の日に行ってみると、引き取り手があつてよかつたと奥さんが喜んでいた、と先生に聞いた。

診療が終わるとすぐ、松崎から十五分ほど車を走らせ、仁科の*寺を目指した。ほかの引き取り手が現われて攫っていかないように念じながら。

国道から山側に登ると、中腹の斜面に広がる墓地を背にして、みごとに曲線を描いた大屋根の本堂が現われる。駐車場で軽トラックから降りると、太い松の枝越しに、早春の駿河湾の水平線が光って

見えた。

「こんちわあと、大声を掛けると、本堂からつづく渡り廊下の奥から返事があつて、あきらかに奥さんが、和服姿で髪をなでつけながら現われた。用件を伝えると、

「ああ、岡田先生から聞いていますよ。」と、すぐ話を通じた。

早速廊下に並ぶ居室に案内された。住職の居室だったらしい部屋には処分を待つ書籍が積み上げられ、その隙間に数艇の帆船模型が行き場を失つたように置いてあつた。

古い海賊船、近代的な帆船と、四艇はあつたろう。いずれも一抱えするほどの大きさだから、それだけで、四畳半ほどのその部屋は占領され、人が寝起きするスペースはない。帆船はいずれも繊細に作られ、マストや索具が飛び出しているから、ちよつと裾を引っかけただけで、ひっくり返つたり破損してしまふだろうから、辛うじて残つた空間を動くにも注意を払わなければならない。

「確かに、手狭ですね。」と私。

「ここは方丈だったのだけど、置き切れなくなって、私の部屋にも侵略しているのです。」と、奥さんは隣部屋の障子を開いた。そこにも三艇が畳の上に並んでいた。帆船のほかにごつい和船の模型もあつた。

私は自分の名刺を渡し、ヨット関係の小さなクラブをやっているが、クラブハウスにヨット乗りが集まるので、鑑賞され賞賛される場所として最適であろうこと、ご主人の遺作を散逸させないで一堂に収集すべきこと、など、力説した。

一艇だけは、すでに中学校の校長先生が引き取つていったそうだが、それは下田に來航した黒船の模型で、地元の歴史の教育目的に叶いそうなので、なんとか引き取つてもらえた。しかし残りの模型船の引き取り先をどうやって探すか困つていたという。

私と奥さん、両者の利害はたちまちに一致し、今日中に引き取ることになった。

問題は運搬方法である。段ボールのような箱には大きすぎる。なまじつかな箱では中で揺れ動いて壊れてしまう。しかも計七艇もある。軽トラックではとても一回二回では運びきれない。

考えた末、一旦家に帰った。布団や毛布、寝袋などをかき集め、すぐ寺に戻った。それらを軽トラックの荷台に、ふわふわ、モコモコに敷き詰めた。そのモコモコの間に帆船を三艇ほど、重ならないように距離を離して埋めた。これなら、多少揺れても、毛布や布団がクッションになって壊れないだろう。

「ずっと部屋に閉じ込められていた帆船たちも、これで、外の、本当の風を帆に受けることになるわね。」

奥さんが、布団と毛布の海に浮かんだ船たちへの送別の辞として、

実に上手いことをいった。

数回往復して、その日のうちに全部運び出した。最後の搬送前に、松崎町のフランス菓子店で高級菓子を一箱買い、奥さんにお礼にお渡しした。渡した直後、奥さんが歯医者に通っていることを思い出し、

「あ、奥さんの歯によくないものだったかな。」といたら、

「いえいえ、歯に悪かろうと、私は洋菓子には目がないのよ。」

もう返さないわよとばかりに、菓子箱を抱えこんで、にっこり笑った。私もこれで帆船を返さなくても済むかなと、安堵した。

最後に、製作者の、^(一)住職の名刺を、記録のために一枚所望した。製作者は公表を望まなかったようなので（帆船模型の製作はあまり人に知らせなかつたらしい）、寺と住職名を伏せる。

わがクラブに持ち帰った模型船は七艇。そのうち帆船は五艇あった。あと二艇は板で丈夫に作られた和船の北前船で（これも帆船ではあるが）、別人の作だった。（この二艇はその後、民宿をやっている私の知人が、和船はあんたの家には似合わないけど、うちの民宿なら似合うな、と強引に持っていくた。）

クラブは広いけれど、これだけの数の帆船を陳列する場所を確保するのは苦労した。まず、天井まで届く書棚が三列あるのだが、その本を殆ど廃棄することにした。本を捨てるのは、以前は辛いことだったが、この年になると、愛着捨てがたい本は少なくなる。海洋関係は残し、文学書などをどんどん捨てていったら、軽トラツクの荷台が満載になった。

私の住む南伊豆町は書籍をリサイクルしていて、役場に持ち込むとその重量に応じてごみ袋と交換してくれる。文学や詩集は大量のごみ袋に代わった。ついに本場に役に立つものになったわけだ。

書棚の空いた棚の板を、マストが当たらないスペースを確保するために取り外し、そこに三艇が収まった。残り一艇は衣装箆の上、あとの一艇は古い海賊船で、バーの壁に飾ってあるアンティークな木製の大舵輪（これも海賊船のもだったと信じている）の前に置いた。すべて収まってから、帆船が引き立つように照明やインテリアをあれこれ工夫した。

寺院に長年置かれて抹香臭かった帆船たちは、クラブのホールの、高い、低い空間に配置され、照明に幻想のように浮かび上がった。すると、無人だった帆船の上に、船乗りたちのざわめきが湧きあがり、七つの海を駆け巡った数百年前の冒険者たちの自由と勇気が甦った。

それから数日、私は帆船模型に心を奪われ、インターネットで船の履歴を調べて楽しんだ。帆船たちはいずれも実にドラマチックな、栄光や挫折のドラマを持ち、私の想像力を満帆に膨らませた。

きつと、製作者の住職も同じように、想像上の大航海を模型船に託したにちがいない。

模型はいずれも船名を記した台座がついていたので、容易に識別できた。一番古い船型は十六世紀のもので、大舵輪のまえに置いた、五十分の一模型のガレオン船である。

● GOLDEN HIND

イングランド王国が一五七七年に建造。スペイン船の略奪を行った。

● THERMOPYLAE

イギリス船、一八六八年進水。中国からのお茶を運び、テイクリッパと呼ばれた。カティサーク号と高速を競った。やがてスエズ運河の開通により中国へのルートは短縮された上に、帆船は無風のスエズ運河では帆走できなかつたので、汽船に役目を譲った。晩年は哀れで、ポルトガル海軍の実弾射撃の標的にされ、炎に包まれて沈んだ。

● CONSTITUTION

一七九七年建造、アメリカ海軍の木造艦船。アメリカ合衆国憲法から名を採った。砲数四十四門を持つフリゲートで、おもしろいエピソードにあふれ、飽きることはない。市民の援護があつて何度も解体を免れた。アメリカのシンボルとして、いまでも現役らしい。

● 咸臨丸

有名な日本の帆船で説明を要さないだろう。甲板に目を近づけると、乗っているような気分になる。艦長の勝海舟が出てきそう。海舟は太平洋初の航海中、船酔いしてほとんど艦長室から出なかつた。福沢諭吉、ジョン万次郎が同船している。海舟は正確な役名は艦長ではないが、通訳の万次郎が艦長で押し通したそう。

● ESMEERALDA

スペインで建造され、一九五三年に進水し、いわくがあつてチリ海軍の所有となつた。チリ海軍の練習帆船として、世界中を友好のために巡り、浮かぶ大使館、と呼ばれている。沖縄海洋博覧会などたびたび日本にも寄港している。エスメラルダとはエメラルドのことで、船体上部は白色、喫水線下はエメラルドグリーンのもとに麗しい宝石のような帆船だ。

一か月ほど経つと、私はあれほど夢中だった帆船本体への関心を失った。伊豆半島南端の海の、夏の灼熱の太陽と潮風に晒される日々

を通過すると、空想の海に浮かぶ帆船模型のことは念頭から消えてしまった。忘却された船たちも、昔からそこに居たかのように埋没していた。

秋がやってくると、本が恋しくなる。本棚に目をやると、ごみ袋と化した本たちの跡地を占領した帆船たちがいる。

エスメラルダが据えてある棚の上に目をやった。そこは手の届かない高さの棚で、もう読むことはないだろうが、ごみ袋に換えるには惜しい書籍を保存しておいた棚だ。

そこに、分厚いポオの全集が一冊あった。原語の英語版で、カバーのイラストは、不気味な大ガラスが頭蓋骨を突いている。ポオの有名な詩、「大ガラス」のイメージだ。短編集には、海を舞台にしたしたいくつかの奇怪な物語がある。巨大な渦巻きに巻き込まれた男の話。暗号を解読して海賊キッドの宝を発掘する話。帆船が異次元の海域に引き寄せられていく話。たしか、「壇の中から発見された手記」というタイトルだったかな。うーん、この物語はあまり覚えていない。もう一度読んでみるかな。

目の前の帆船模型に触発され、そんな気になった私は、近くの椅子を引き寄せ、その上に立って手を伸ばした。両側の厚い本の間には挟まれ取り出しにこずっている、つるつるのカバーだけが外れて抜けた。カバーは私の手からも抜け、空中でひらひらと開き、大ガラスが羽を広げて飛んだ。

私は大ガラスを捕まえようと、不安定な椅子の上で、もう一方の腕を伸ばした。腕の肘が、棚の下のエスメラルダ号を払ってしまった。

帆船は中段から落下した。

重心が船底にあったのか、模型船は船底を下にしてまっすぐに床に落ち、脆いマスト類は奇跡的に折れないで無事だった。私は椅子から降りて帆船を両手で抱え上げた。

船体が船底のキールに沿って割れていた。損傷具合を調べようと割れ目を覗いた。

中に紙束のようなものが見えた。指を突っ込んで引き出すと、それは紐で緩く結んで筒状にした数十枚の原稿用紙だった。パラパラと端をめくると、ぎっしりと手書きの字が書き込んである。

手紙？ 手紙にしては大部過ぎる。

手記？

「壇の中の手記」の代わりに、帆船エスメラルダ号の中に手記が？！この偶然の一致の出来事に、私は面喰ってしまった。

これは帆船模型の製作者の僧侶の手記であるにちがいない。私は、湧きあがる好奇心を抑えることができず、紐を解き、丸めた原稿用紙を床の上に押し広げた。

2、手記

私は伊豆の住職の家に生まれ育った。

住職の父は私に後を継がせたいと思っていたが、科学万能の現代、宗教、仏教に生涯、身を委ねる気持ちは、若かった私には薄かった。だが、一応、宗教系の大学に入学し、そこで広く知見を得てから、自分の進路を決めようと思った。東洋哲学と西洋哲学の講義を選んだのもそんな気持ちからだ。

さて、東洋哲学のことだが、国際的に著名な仏教学者A教授の東洋哲学の講義で、ある学生がこんな質問をした。

「仏教界では、縁なき衆生、度し難し、という言葉がありますが、これは差別ではありませんか？ 縁なき衆生には届かないほど仏の慈悲は狭いのですか？」

すると、A教授は真つ赤になつて、「君、何をいうか！」と怒鳴つた。質問者の声は私の後ろの席からだだったので、私は振り返つてその学生を見た。詰襟の学生服をきちんと着て、日焼けした精悍な顔立ちのその学生は、立ち上がって頭を下げ、平然と教室を出て行った。

私はA教授の講義をそれ以降、敬遠した。教授がいきなり怒りを発したのは、以前もこの学生に授業を引っかけまわされたことがあったからだろうが、仏の慈悲はさておき、この教授の度量の狭さに失望したからだ。

この学生は大変な秀才で、わざと教授たちを怒らせ、あるいは立ち往生させる常習犯であることを後で知った。彼は野々村という名で、一年以上級の先輩だった。

ところが、この嫌がらせ屋の野々村があっさりやり込められる後日談がある。

ある大宗派の管主だった高僧が、出身校であるこの大学を訪れたことがあり、その機会に、ささやかな講演会が催された。野々村も参加した。

元管主がつるつるの頭をなでながら一時間ほどとりとめもない話をして参加者もそろそろうんざりしはじめたころ、野々村が手をあげて質問を請った。

「ただいまご高話でも触れられた般若心経についてですが、未熟の私が理解に苦しんでいる言葉があります。ぜひ、大先生のご教導を賜りたいのです。」

「ああ、何かね、君。」と管主は磊落に答えた。

「般若心経末尾の、羯諦羯諦、です。ここだけは漢文に意識されておらず、音訳のように思えます。なぜ、ここだけ漢訳を避けて音訳

なのか。そして、原文サンスクリットの、ギャテイ、とは本来、何を意味したのか、お教えください。」

私は内心小躍りした。高僧がうーむと立ち往生する姿を見たかった。参加者はみな息を呑んだ。

ところが、高僧は、わはは、と笑った。そしてつるりと頭をなでて、こういった。

「忘れたよ。」

西洋哲学の鵜飼教授は、私の人生に深い影響を与えた。教授はアルピニストとしても著名であり、山岳関係のエッセイや詩集を随分と上梓している。先生の始めての授業はいまでも覚えている。鵜飼教授は教壇に立つと挨拶もせず、黒板にこう書いた。

The solution of the riddle of life in space and time lies outside space and time.

「時空における生命の謎の解法は、時空のそとにある・・・現代哲学者のヴィトゲンシュタインの言葉だ。彼は哲学における厳密な言語解析を主張した。しかしだよ。時空のそと、とは何をいつているんだね。内か外かを決定するためには、時空に輪郭を、定義を与えなければならぬ。」

また、生命の謎というが、これも生命の定義なしには意味をなさない。つまりこの文章は検証不能な、勝手なことを云っているだけ。語りえぬものについては沈黙せよ、と自らもいつているんだ。まったく矛盾してるね。まあ、詩、か、経文のようなものだ。

私がいいたいののは、だね。日常会話から発達した言語を哲学に用いるには、言葉の厳密な定義を行わなくては、言葉の共通性がないから、論理性を有しないのだ。数学の数や定理とおなじように、普遍性、客観性、法則性、実証性を持たなければならぬ。それが可能な体系にのみ、学門、という名が冠せられる。たとえば、経済学は、学という以上、法則性や客観性で裏付けできなければ学問とはいえないのに、だよ。日本経済は今もって経済学者のだれも予測できず、株で儲ける確実な理論もない。経験則から法則性を導き得ず、学問といえるかどうか、怪しいね。怪しい学問はいっぱいある。心理学なんかもそうだ。そしていちばん学問という名に値しそうなものが、哲学だ。」

学生たちは最初の授業の緊張から解放されて、わっ、と笑った。こうして私たちは最初の講義で、学問とはなにか、という根本的な命題を叩き込まれたのだった。

講義のおわりに教授はこう締めくくった。

「私の一学期の授業はこれでおしまい。もう出席しなくともいいよ。私も講義をしなくても済む。もし哲学についてもっと理解したいなら、こんな教室での私のおしゃべりを聞いてないで、野外講座にいらつしやい。紺碧の空と眩い太陽、夜の星たち、饒舌な鳥の声、楚々と花開く高山植物、それらの中心に座して思想するほうが生理的に自然だ。瞑想、である。瞑想とは、大自然つまり宇宙と人間精神が一体化することなんだ。」

鵜飼教授は学校の講義をさぼって、学生を誘って山に行きたいらしい。先生は大学の山岳部の顧問でもあった。私は先生の人柄に惹かれ、山岳部に入会してしまった。

山岳部員の先輩に、野々村がいた。それから後、私は彼に大層面倒を見て貰った。

夏休みに、鵜飼教授の案内で新入部員たちは北アルプスを縦走した。長身瘦躯の先生は庭でも歩くように軽々と稜線を越えて行った。愛弟子の野々村が先生の分まで荷物を背負ったせいもあった。

下山する地点の山小屋で、露天風呂に浸かった。岩の間の狭い湯船は、先生と野々村と私の三人でいっぱいだった。壮大な天の川が手の届きそうなほど間近に頭上にあった。無数の星が激しく揺らめき、ぐるぐると回転していた。ウイスキーの飲みすぎで私の頭がぐらついているのかと最初思ったが、昼間熱せられた地表から立ち昇る大気の乱流が、歪みつつけるレンズとなって、視界を攪乱するからだ。

黙然と湯の中から、ざわめく星たちを眺めていた野々村先輩が、感に堪えかねたように、口を開いた。

「先生、宇宙はなぜ、また我々はなぜ存在するのでしょうか。」

顔を湯でぬぐっていた先生は、びっくりしたようにその手を止め、「おい、これは人類究極の問い、だよ。哲学の根源的命題。」

〈なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？〉

Why is there something rather than nothing? >

君は哲学者としての私に聞いているのかね。それとも詩人の私に？」

「両方に、です。」

野々村が、例の意地悪な質問をわざと投げたのではなく、大自然の真ただ中に置かれて、根源的な疑問がこの湯のように湧きあがり、心酔する先生に、真摯に問いかけたのだと、私は素直に感じた。先生もそう感じたらしくしばらく黙想していたが、

「君たちの勉学の主軸たる仏陀がこの命題にどう答えているか、知っているかい？」

野々村は、うっと詰まって、恥ずかしながら知りません、と答えた。

先生は笑ってこう答えた。

「仏陀も弟子から同じような質問を問い詰められた、しかし、捨置記（しやちき）、つまり答えない、という態度を取った。弟子の質問は、君たち仏教者を目指す者には大変参考になるだろうから、もう少し詳しく説明しておく。」

第一は、世界が常住がどうか、つまり永遠性について。

第二は、世界の有限、無限について。

第三は、霊魂が身体と同一であるか。

第四は、如来は死後に存在するか、つまり来世はあるのか。

要約するとこの四つになる。」

野々村はひどく考え込んだ様子になった。元管主に、忘れたよ、とはぐらかされたことを思い出していたのかもしれない。

「先生、なぜ、仏陀は答えなかったのでしょうか。だっていずれも仏教の本質に係る命題でしょう。」

「その弟子は、仏陀が答えないなら、おれは弟子をやめて世俗にもどる、と脅した。だから私は君の質問には答えるよ。君にここで去られたら困るからね。荷物担ぎがいなくなる。」

私たちは声をそろえて笑った。

「仏陀が、なぜ答えなかったか、私も疑問だったが、後で知った。このような問いは、苦からの脱却、悟りと涅槃の至りに、有害である、という〈毒矢の喩〉という教えがあるのだ。これについては君自身で調べたまえ。」

それから先生は、じっと眼をつぶっていたが、静かに語り始めた。

「存在か無か、いずれかではなく、どちらでもない状態、存在と無は混然としている。そのどちらかに傾くためには、認識されなければならぬ。認識、観察されてはじめて、存在の状態が、決定する。」

現代の量子力学はすでにこの事実、ゆらぎと不確定性を知っている。宇宙は、存在と無のいずれでもない重なりあった状態だった、ということはいずれも我々が直感で理解できる。だって、あるわけでもなく、ないわけでも、どっちでもないんだから。そうなると宇宙そのものが無限にあるかもしれないし、ないかもしれない。

だが、この我々の宇宙はゆらいだ。存在と無の間を。

存在のほうに傾いたとしても、観察されなければ、存在しない。

宇宙はそこで二つの法則に身を委ねた。

偶然と確率。これがわれわれの宇宙を支配する法則であることは、現代物理学の基本だ。

存在するためには、認識者を必要とする。認識者を生成するために、宇宙は膨大な時空と物質を用意、放出した。認識者、つまり知的生命体を生成する偶然の確率は、ちょうど星の数に及ぶだろう。地球という生命体が可能な場ですら、ほとんど偶然であり、さらに

そこで認識者に至る人類が生成されるのもまた無限に近い偶然だ。空を見たまえ。その偶然の実験に失敗した無数の星が散らばっているだろう。

認識され、観測され、計測されるために、尺度が必要である。長さつまり空間、そして時間だ。しかもこの時間と空間も重なって、物質の状態は、観測されなければ時空は決定できない。これも量子力学の基本、不確定性の原理だ。

宇宙が存在するのは、観測する人類が存在するからだ。人類が存在するのは、宇宙を認識する役割をになっているからだ。表が認識されるから裏がある、というわけだ。

私の最初の講義で引用したヴィトゲンシュタインの言葉を覚えているかね。生命の意義、宇宙の存在理由、は私の定義では今話したようになる。そうすれば、解法は時空の外、という表現も意味をなさなくもない。もつとも彼はこうも云っている。

〈世界がどのようなになっているかではなく、世界が存在すること、それ自体が謎だ。〉

君の質問と同じ、なぜ、宇宙は存在するか、という問いかけ。そしてそれは答えられない謎だ、とこの哲学者は逃げているけどね。

このような、認識されてはじめて存在する宇宙、という私の説明は人間原理とよばれる。だが、私の詩人としての思想はすこし違う」

先生はふたたび目を閉じた。日焼けして皮がむけかかった、とんがった鼻の先に湯気の水滴が浮かんでいた。

「存在は、影。幻影だ。色という物質は存在しないだろう。音も存在しない。これは人間が、波長を認識することによって、生じる存在だ。波長、つまり振動だ。

物質も粒子という固定したもので、したがって引力が距離に比例して互いに引き合う、と理解されてきたろう。だがブラックホールの底やビッグバンの始まりのような距離が極限のゼロの世界では、引力が無限大、計算不能となって相対性理論が破綻する。だから宇宙物理学は、宇宙創成については説明不能だったのだよ。

近年、その破綻から逃れるために、物質は粒子ではなく、振動する弦、とする理論が主力になってきた。そしてさらに存在はホログラフィーと呼ばれる振動の重なり合い、という風に発展してきた。

私は数学の造詣は浅いが、その論理は私の詩的感性に近い。つまり、世界は振動する極小の弦の膨大な集合だというのだ。

振動する弦、そうさ、音楽なんだよ。

君たちも私も振動し、重なりあい、共鳴し合っているんだ。宇宙は壮大なオーケストラさ！」

先生はオーケストラの指揮者のように両腕を夜空に向かって突き上げた。私は感動して、星空を見上げた。星たちは揺らめき、うち

震えて、深遠な音楽を奏でているように思えた。

存在は認識されて、はじめて確定する、という、先生の宇宙論をここにあって記したのは、数年後に起こった奇妙な事件に関係するからだ。

二年後、先生は南米アンデスの最高峰で未踏のカサデロ登山を試み、遭難した。雪崩にあっただけで、登頂に成功したのかどうか、不明のままだった。

私たち山岳部はその翌年十二月、先生の弔い合戦と称して、先生のパーティが遭難したルートのカサデロ登山を計画、野々村を隊長にアルゼンチンに渡った。

南米に入ってから、私たちはランドクルーザーに積んでおいた荷物を盗まれた。しかも金目のものではなく、パーティ五人の、一週間分の男のパンツだ。気づいて町に下着を買いに行ったが、なぜか前開きの男用パンツが売っていない。やむなく前の開かない女用のパンツを買った。あとで気がついたのだが、どこの衣料店に行っても前開きパンツは売ってなかった。だから、前開きの日本のパンツは盗みたくなる貴重品だったのかもしれない。

余談はさておき、高山病で締め付けられるような頭痛に悩まされながら、六六〇Mの山頂を目指した。カサデロは火山で火口の周辺にいくつかのピークがあって、どのピークが山頂か迷いやすい。過去の登山チームもピークを誤認し、失敗していた。当初晴れていて、サメが口を開いたような火口部分が目視されたが、突然、天候が急変し地吹雪が襲った。私たちは視界と方向を失った。登山ルートはそこで二方向に分かれる。右か、左か、戻るか、三つの選択に迫られた。基地に戻れば、またここに戻るチャンスはない。天候が数日後に悪化するのわかっていて、隊長の野々村は前進を主張した。だが、右か左かのルート選択には自信がなかった。

その時、先方の吹雪の中、左のルートに人物が現われ、手を振った。こつちだ、という風に。

「鵜飼先生！」

野々村がそう叫んで三十メートルほど先の人物めがけて走った。私たちも走った。

私たちは確かに見た。先生の愛用だった赤いキスリングを着た人物を。濃いサングラスをかけていたが、見慣れた先生の登山姿だった。手を伸ばせば届きそうな距離まで近寄ったとき、姿が忽然と消えた。

我々は呆気にとられた。山の亡霊の話はよく聞いたが、それはほとんど一人の目撃者が極限状態にあって、錯乱していた場合だ。われわれは五人全員、錯乱状態にあったのではない。全員がはっきり

とした意識にあつて見たのだ。

野々村は意を決して左のルートを選んだ。高山病の痛みがひどかった私と二人の部員がそこに留まることになり、テントを張って待った。数時間後、野々村たちは下山してきた。

「山頂にアルミのコツフェルがあつたよ。」

〈カサデロ登頂、一九**年、葦笛山岳会、鵜飼孫六ほかチリ人名〉

コツフェルにはそう刻んであつた。これでカサデロの初登頂は先生によって成就されたんだよ。そのコツフェルを遺品として持ち帰ろうと思つたが、初登頂の記録として残してきた。代わりにおれは自分のコツフェルにこう刻んで並べて置いてきた。

〈鵜飼先生、安らかにお眠りください。**大学山岳部一同〉。

私は帰国してからもずっと、先生の赤いキスリング姿が脳裏に焼きついて消えなかつた。そして先生の存在と認識論が重なりあい、我々が認識したから、先生はあの場に存在したのだ、と思うようになった。あのとき、私たちが迷っていたときに、先生が居たらな、と私は願つた。部員全員が同時にそう願つたのかもしれない。

このことをきっかけにして、徐々に私の世界観が変貌していった。野々村が言及した縁なき衆生、というのは、つまり、認識を持たない者のことである、と。

数年後に、私は僧侶の道を選択したのだ。亡父のあとを継ぎ、住職として西伊豆の寺に帰つた。

西伊豆のこの仁科の港は毎年の台風の襲来のほかは、実に平和なところだつた。この平和を破るものがあつた。

虫歯だ。私は松崎町の岡田歯科医に救済を求めた。それ以来、かかりつけとして通院するようになった。先生は小型ヨットの乗り手でもあつたので一度乗せて貰つたことがあつたが、傾いた（ヒールというらしい）ヨットから転げ落ちそうになり、船酔いもして、一度で降参した。ヨットの話はそれ以来先生も避けるようになったが、一度だけ、なにかの関連で、この近くに停泊しているヨットに話が及んだことがあつた。先生がいうには、

「松崎を貫く那賀川は河口近くで大きく湾曲しているのだが、その曲がりの途中に小さな岩科川が流れ込んでいて、丁度その合流点に船溜まりがあり、そこに小型のヨットが一艘停泊している。この診療所の近くだが、もう随分昔からだ。」

最初はヨットを修理する目的でそこに停泊したそうだが、それから、ずっと修理し続けている。どこを修理しているかわからないが、修理が終わったら、世界一周の旅に出るといつているそうだ。あれ

から数年経つが、一向に世界一周に出かける気配はない。世界一周よりも修理することが人生の目的になったのではないかな。私もヨット乗りだから、一度寄って声をかけてみたが、どこを修理しているかも隠しているようにいわないし、いかにも変人で無愛想だったから、それきり近寄らなくなった。」

海に出ないヨットなら、船酔いもないだろうと安心して、私は歯科医院の帰り道に、その船溜まりに寄ってみた。ヨットには興味はないが、世界一周を夢見ていながら、ずっと自分の巣穴に籠っている人物に興味を抱いたからだ。

歯科医院の近くだし、二つの川の合流点だから、船溜まりはすぐ分かった。それにヨットはマストを揚げているから、遠くからでも分かる、近くに車を停めて周りをぶらぶらしたが、人影はない。開いているハッチへ声をかけるほどではないので、石を拾って水に投げ、帰ろうとした。

ハッチから首が覗いた。白髪交じりの長髪を後ろで結び、度の強い眼鏡をかけている。目が合って私は軽く会釈した。

「あ、坊さん？」

僧衣を着て歯医者には行かないけれど、作務衣姿で剃髪しているから、僧侶であることは何となくわかるのだろう。

「はあ、そうです。」

「近くに葬式でも？」

「いやその歯医者さんの帰りですよ。天気がいいので、海辺をぶらぶらしたくなつて。」

「海と僧侶という組み合わせはどうも馴染まないですね。」

「そうですかね。私の寺は海を望む位置にあつて、毎日海を拝しているのですが・・・」

「あはは、それは失礼。伊豆半島には海辺に寺が結構ありますね。ああ、そうだ。この駿河湾の海域で、明治時代の高僧が海の生き物に引導渡した例があつたな。」

「海の生き物？」

「西伊豆で虐殺されたイルカ六百頭を憐れんだのです。善なるかな大イルカよ、と呼びかけた一首がとても印象に残っています。その碑がありましたね。」

「どこです？」

「西伊豆の安良里です。地元だからご存知でしょう。」

「安良里はうちの寺の北ですが、明治の高僧の碑は知りませんでした。」

「灯台元暗し、ですね。」

「場所を教えてください。帰り道に寄ってみます。」

「私がヨットで安良里に入ったときに、入り江の一番奥で見ました。」

碑だからそう簡単には撤去されないでしょうが、あれから十年以上は経っていますからね。道路もあちこち拡張され、変わっているだろうし。もしご迷惑でなかったら、ご案内しましょう。」

「このヨットで？」と、私は恐れた。

「いや、このヨットは修理中です。すみませんが、お坊さんの車で連れて行ってください。もう随分と外に出ていないからなあ。」

食料などはどうしているのか、と疑問に思ったが、船溜まりのそばの雑貨屋のおばさんに頼んで日用品を手に入れること、名は西村、ということなどを、車で二十分ほどのドライブの間に聞き知った。

安良里は周りが山に取り囲まれ、湾入口が北を向いて狭いので、台風波浪や冬の西風から守られ、船舶にとっては良港だ。湾内は広く、遠洋漁業に出る大きな船団の絶好の母港となっている。最奥の大きな造船所に通じる道路を進み、造船所の手前の岸壁に車を停めた。数艇の小型ヨットやボートが舳つてあつた。

あつた、あつた、と車から降りた西村さんが指さした。

背丈ほどの苔むした石碑が建ち、そばに碑文が掲げられていた。

〈海豚供養塔碑文〉

明治十五年壬午の春、余請いに応じて、豆州那賀郡安良里村に赴きて、菩薩戒会を修授す。

これに先立つ一月十九日、この村に大漁有り。その實際を聞くに、イルカの大小六百余尾。海門の外に輻湊す。これにおいて一村の漁人相集い、たちまちにして小舟十数隻を馳せて、それを海門の内に駆り、港口に竹網を張り、ことごとくこれを捕う。大なる者は二丈、小なる者も九尺を下らず。本日より二月十日に至る二十三日の間、港内にこれを養い、魚商の来たるを待ちてこれを売り、代価およそ一万余円収得して、おおいに村民を賑わすと言えり。

開会に先立つ一日、網組当番のなにがし有りて、龍泉の長老を介し来りて想見し、その事実を説き、更に乞う。イルカの為に供養塔を建て、甘露門を開かんことを願う。余賛成して曰く、明日勝会を開くに、汝、漁人隊において人を選び、イルカの為に戒徒となり、懺悔礼拝を行ずれば、即ち最上の追善なり。漁人もまた必ず滅罪の益あらん。なにがし謹みて趣を諾し去り、余の命に従いて浜方五人組の内にて人を撰し、戒徒と作して、毎日出頭し懺悔礼拝す。遂に塔下に戒脈を埋納して、今、井山一会の浄侶を宰して焼香。無遮会を修す。

ちなみに、漫に小伽陀一首をねんじて、すなわちイルカの供養に充つる者なり。

伽陀に曰く、善なるかな大イルカ、安良里に輻湊し、解脱門に結縁す。六百有余尾

時に明治十五年壬午の春四月二十七日

円覚寺管長 権大教正 今北洪川 謹誌

この碑文は後になって私が一人で行って書き写したものだ。書き写しながら、海の生命あるものへの慈しみの大きさに私は圧倒され、偉大な先達に頭が下がった。

(注)「伽陀(かだ)」とは四句から成る韻文。

西村さんとはそんな縁があつて、私の歯の治療の帰りに、天気の良い日は西村さんを訪れることが多くなつた。西村さんは大変な博覧強記で、話始めると縦横に話題が展開し、飽きることがなかつた。知の広場で遊ぶようだった。私は大学時代に戻つたように心が若返つた。僧侶になつてから檀家や地元での付き合ひの範囲というのは、まことに平凡なものだったのだ。

この人は一体何者だつたのだろうか、いつも思ったが、聞かなかつた。西村さんも、雑貨屋のおばさんのほか、話し相手はいなかつたから、私を格好の話し相手として受け入れたのだろう。坊主は貰ひものが多いのですよ、と、私も何かしら手土産を持参した。ときどき、ギャレー(船内の炊事場)でコーヒ―を淹れて岸边に座つて飲んだが、決して船内には私を招き入れなかつた。

あるとき、サルトルの「存在と無」について西村さんが話したので、私は大学での先生だつた鵜飼先生の宇宙論と南米の山吹雪での出来事を話した。

「鵜飼先生? 鵜飼孫六さんでしょう。知っていますよ。『葦笛』という詩集の編集と出版に携わつたことがあります。」

西村さんが出版関係の経歴を持つ、と知り、鵜飼先生の思い出話に花が咲いたあと、西村さんはこんな話をした。

「山にはそのような不可思議なエピソードが、それこそ山のようにあるでしょうが、海もまた不可思議なエピソードに満ちています。

友人のヨットマンが仲間と航海中、夜のウォッチを交代して仮眠し、ふと目を覚ますとデッキの仲間がいない。落水したことはすぐ分かつた。ただちに船をＵターンさせた。一時間ほど仮眠したのだから、落水してから一時間は経っていないはず。夜の海は真つ暗だと思ふでしょう。ところが、夜の海は明るいのです。幸い荒れていなかったもので、視界はあつた。全力で機走し、きらきらした海面を探し続けた。そして、四十分位して、黄色いライフジャケットをつけて海面に浮いている仲間を見つけたのです。一時間も海に浮かんではいれば、数ノットは潮に流される。当然ヨットも同じです。広い海面で、流されている仲間のところまっすぐに辿り着くのは、奇跡以外あり得ない。落水者がテレパシーのようにヨットを引き寄せ

たのだろうと、ヨット仲間では語り継がれています。だが、私の場合は・・・」

西村さんは急に声を詰まらせた。

「・・・私の場合は、見つからなかった。」

「だれを、です？」

「なおみ、です。私の妻です。落水に気づいてから、一日中探しました。勿論夜が明けてから保安庁の船も、空からも搜索しました。結局発見できなかった。私は勤め先を辞め、再びヨットに乗ってずっとその海域を探し回った。」

「その海域とは、どこです？」

「この伊豆半島の西の海域です。目の前の駿河湾です。私はだんだんこの海を憎むようになって。」

西村さんはそれきり沈黙し、ヨットの中に入ってしまった。

気まずい思いをさせたかな、と私も黙ってその場を去った。それから一か月ほど会いに行かなかった。

ある日、診療所から出ると、そこから見えるはずのヨットのマスケットがなかった。すぐに船溜まりに行ったが、NAOMI号も西村さんも消えていた。

船溜まりのそばの雑貨屋に寄った。店のおばさんが顔を出し、

「ヨット、出て行ったよ」と、無愛想にいった。

「いつですか？」

「もう一週間になるかな。そうそう、お坊さんに渡すものがある。」

西村さんから預かったもの

おばさんは奥に引っ込んで封筒を持ってくると、私に手渡した。

私は封筒を開き、達筆で書かれた手紙を読んだ。

*

先日は突然引きこもってしまい、失礼しました。

あのあと話そうとしたことがあったのです。鵜飼先生の、吹雪の中での出現のことを伺ったときに、私の妻の、その後の出来事を話そうと思ったのですが、恐ろしくて口に出せなかった。でも文章になら書けるので、そのことを書きます。

妻の遭難のあと海難事故処理に多くの時間が取られ、私は勤め先を辞めました。私はふたたびヨットに乗り、この海域を徘徊していました。この駿河湾から離れることができなかった。

ある夜、沖合で月の明るい夜空を眺めて舵を握っていると、コツコツ、とスターボード（右舷）を叩く音がします。波が叩く音ではなく、硬い音なので、流木でも触ったかなと思い、船べりから腹這いになって身を乗り出して、海面を覗きました。海面になにか浮い

ているように見えました。

すると、いきなり強い力が私の上半身を引っ張り、海に引きずり込もうとする。私は片手でスタンションを掴んで辛うじて落水を免れたのですが、もう片方の手が、水面に届いた。手に何かが触った。あわてて手を引き上げました。

それきり、何も起こりませんでした。浮遊していたように見えたものももうありません。私は身を起こし、誤ってスリップしたのだろうと考えて舵のところに戻り、舵を握りました。すると指の間になにかが絡まっているような感触がして、舵から手を離し、広げた手を月明かりに照らして見ました。

黒髪が一本、人差指と小指の間に絡んでいたのです。長く、真っ黒で、私のものではないのははっきりしています。(その頃の私は今のように長髪ではなかった。)

私の執着が、妻を引き寄せたのです。

後に、私はそのときの恐怖を句に託しました。

〈去りてなお指に纏わる黒髪の〉

このあいだ、数日前ですが、妻が久しぶりに私の夢に現われました。静謐な微笑みを浮かべで、私を招いているようだった。お坊さんのお付き合いで私の執着心が拭かれたのでしょうか。

そして海への憎しみが不思議に消え失せた。執着から解放され、私は自由になった。妻を永遠に抱擁する海に、畏敬の念を取り戻したのです。ボードレールを引用すれば、

〈自由な心は、海を愛おしく思うはず〉

最後にお問い合わせがあります。

私が修理していたのは私のヨットNAOMI号ではありません。帆船の模型です。停泊したままの狭いヨットの中で、小さな帆船を造りながら、想像の中では巨大な帆船ですが、私は世界の海を航海していた。時間を過去までさかのぼり、自由に。だが不器用な私はなかなか完成させることができませんでした。やっといま、エスメラルダ号の帆を張るところまで来ました。この帆船ももう少しで航海の準備ができます。

私はこれから、駿河湾と妻の呪縛から解放放たれて、自由な航海に出ます。エスメラルダ号で？

いや、NAOMIで・どこに至るか分かりません。

航海するヨットの中では揺れて、帆船模型を製作し続けることはできません。エスメラルダ号を引き取ってください。あとわずかに

残った部分を完成させていただければエスメラルダも喜ぶでしょうが、廃棄されても構いません。一応、道具一式、製作マニュアルと模型関連の雑誌を置いて行きます。お別れに、ランボオの詩を捧げます。

みつけたよ。

なにを？ — 永遠を。

それはなに？

太陽と寄り添っている海さ

この詩、L'Éternité の原文フランス語は、Elle est retrouvée. の一行が始まりますが、直訳すると、She is found.

彼女が見つかった。

となります。

私も永遠を探しに行きます。

では、お元気で。

西村洋平拝

*

手紙を読み終えるのを待っていた雑貨屋のおばさんは、再び、奥に引っ込み、帆船模型を抱えて出てきた。

「かさ張るものを預かっちゃって、困っていたよ。これで場所塞ぎがなくなった。でも、本物のヨットが居なくなると、ちよつとさびしいね。」

私は未完成の帆船を受け取って、車の後部座席にそつと置いた。エスメラルダは貴婦人のように、優雅で美しかった。西村さんもこの優雅な貴婦人に奥さんの面影を重ねたのだろう。

私は、ヨットが舳つてあった場所に立った。それから、西の海に向かい、合掌して経を唱えた。

羯帝羯帝波羅羯帝 (ぎやていぎやてい、はらぎやてい)

波羅僧羯帝 (はらそうぎやてい)

菩提僧莎訶 (ぼうじ、そわか)

行った、行った、かなたに渡った。

そこに辿り着いたものは、

至福である。

3、不可解なり

帆船模型から出てきた僧侶の手記は、ここで終っていた。なぜ、エスメラルダを完成させた後、今度は自分でほかの帆船模型を作り続けたのか、想像するしかない。本物の船には生理的に弱かった僧侶が、模型船で想像の海を渡り、彼岸に往こうとしたのか。

私は手記を元通りに丸めて紐で結え、エスメラルダの船体に押し込んだ。後で、接着剤で壊れた船底を丁寧に塞いだ。

僧侶の手記はふたたび封印された。

私はこの手記のことを、岡田先生にも、だれにもいわなかった。それからしばらくして、齒のメンテナンスで岡田歯科医院に行った。待合室で待っている間（一時間も待っていないなければならない時もある）、片隅の棚に積んである雑誌や本をぺらぺらと、めくる。雑誌はほとんど高級婦人雑誌で、患者の女性がときどき寄贈して置いて行くようだ。

棚の一番下に、いままで気がつかなかった古い写真集があった。松崎町のある写真館が中正の開業以来撮影しつづけた町の写真を集め、町の観光課が出版した。

ページをめくると、松崎の海辺の古いモノクロの風景写真がある。山の上から写した松崎の全景に、那賀川と河口と海が写っていた。川が大きく湾曲したところに、確かに船だまりがあって、小舟が数艇豆粒の様に映っていた。現在のような防波堤も漁港もなく、砂洲が河口に広がっていた。私の故郷ではないが、どこか懐かしい、郷愁をそそる風景だった。

ははあ、手記にあった船溜まりはここだな。撮影年はないが、前後の写真と比べて、大正か昭和の初めのようなようだ。さらにページをくくって時代を追ってみると、戦後昭和五十四年に撮影された写真があった。同じポジションからの全景だ。国道一三六号が今と殆ど同じように完成して、那賀川には道路橋が数本、架かっている。

例の船溜まりだが、護岸され、ここも小さな橋がかかっている。低い橋をくぐれる小舟やボートだけが舳つてあるのが見て取れる。しかしヨットはこの船溜まりに入れるのはとても無理だ。

診察の順番が来て、診療台に横になりながら考えた。僧侶の手記にあるNAOMI号は、僧侶が三十歳のときであるとして、いまから三十年より以前ではない。それ以降は橋が架かっているから、船溜まりのヨットの存在は、不可解だ・・。

今回の治療は、部分麻酔をかけられ、いろんな治療器具（名は知

らない)を突っ込まれての治療だった。歯を削る器具の振動はいやだなあ。治療が終わって台から降りながら、拷問器具がそばの金属皿に並んでいるのを見て、

「先生、この歯を削る器具ですけどね。帆船模型をつくるのに便利でしょうね。狭い奥を削るのには最適だ。」

「ああ、住職もそういつて、ときどき借りて行ったよ。」

「そうでしたか。でもこれ、エアツールですよ。住職さん、エアコンプレッサー持っていたのですか？」

「そこまでは知らないな。」

ありがとうございますと、治療のお礼を云って診療室のスリッパを脱ぎながら、ふと正面の山岳写真に目に止まった。いつも見慣れていた写真だが、今回、とくに気になったことがあった。

「先生、これはどこの山ですか？」

「ああ、アルゼンチンの最高峰、カルデロ。六六〇〇メートルくらいある。」

「え！もしかして、住職さんが撮った写真？」

「とんでもない。彼は高所恐怖症で、寺の屋根の雨漏り修理に奥さんに尻押されて上がったら、転げ落ちたよ。この写真はね、私の山仲間の山岳写真家が送ってきた。彼は世界中の山岳写真を撮って歩いている。」

歯科医院からの帰路、帆船模型の中の手記について考えた。

ヨットの話は事実ではない。

山岳部の話も事実ではない。

だが、帆船模型を作りつづけたのは事実。

では、あの手記は何なのだろう。そこでこう考えてみた。

山もヨットも、岡田歯科医院で歯の診療中に思いついた創作である、と。

ヨットは、診療待ちの時間に待合室で写真集を見つけ、松崎の、まだ素朴な河口と浜が美しかった風景のなかに、想像のヨットを浮かべた。

山は、診療台から目の片隅に見える山岳写真に想像を馳せ、治療中の苦痛を高山病の痛みに転換させた。

そしてどこかの文学賞にでも応募しようと、歯科医院での想像を文章にしてみたが、内容が怪談めいてきて、さらに仏教色が濃くなり般若心経まで持ち出してしまった。これは文学賞には向かないなと中断し、エスメラルダの中に押し込んで、忘れた。

きつとそうだ。私だって歯の治療中はめちやくちやいろんなこと

を考える。ときにはよこしまなことすら考える。私だけではない。患者は診療台上の不安と苦痛から逃れるために、ありつたけ、空想の世界に逃避しようとする。

歯科の診療台とは、人間の空想を絞り出す器械である。

(終)